

4 徳島県立文学書道館【17,660千円】

文学・書道資料の収集・保存、調査研究に努めるとともに、その成果を展示や催し、教育普及事業などに生かし、広く県内外の人々から利用される施設となるよう魅力ある事業展開を図った。

(1) 顕彰、表彰事業【1,572千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	第17回とくしま文学賞	<p>広く県民から文芸作品(10部門)を募集し、発表の場を提供することにより、文芸活動の活性化、県民文化の向上を図った。令和元年度は、小説24人、脚本6人、文芸評論4人、児童文学21人、随筆61人、現代詩266人、短歌453人、俳句370人、川柳159人、連句24人の計1,388人から2,300点の応募があった。各部門の入選作品は「文芸とくしま」に掲載し、当館で表彰した。</p> <p>表彰式:令和2年2月11日(火・祝) 応募者数: 1,388人 応募作品数: 2,300点 会場:ギャラリー</p>	1,571,788
	小計		1,571,788

(2) 年鑑編集・刊行事業【761千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	ことのは文庫 「寂聴少女小説集」	<p>瀬戸内寂聴は作家デビューする前に9年ほど三谷晴美のペンネームで少女小説を書いて生計を立てていた。その代表作12点を収録し、刊行した。中には徳島を舞台にした連載小説「鳴門悲曲」や、敗戦後の日本で明るく生きる少女たちを描いたもの、反戦・平和への思いを込めた作品などがある。</p> <p>文庫本サイズ 1,000部 販売価格:500円</p>	521,640
2	研究紀要「水脈」16号	<p>館が所蔵する文学者や書家に関する作品や資料等の調査研究を行い、その成果を紹介するために刊行した。</p> <p>B5版サイズ 700部 販売価格:無料</p>	238,700
	小計		760,340

(3) 教育普及育成事業【2,821千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	文学講座 芸術・文化を語る	<p>徳島ゆかりの芸術家、研究者、文化人に専門分野のお話をしていただき、平和で心豊かな社会の創造について考える講座。小説家の山本渚氏、舞踊家の桧千尋氏、県立近代美術館学芸員の江川佳秀氏、毎日新聞記者で作家の米本浩二氏を迎えた計4回の講座は、いずれも専門家ならではの見識と豊富な経験に学ぶところが多く、いずれも充実したものとなった。</p> <p>日時:平成31年4月～令和元年7月 (全4回・各土曜) 受講者数:171人 受講料:無料 会場:講座室</p>	229,042

(3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
2	文学講座 言の葉テーマ朗読会	<p>展覧会に即したテーマと反戦にちなんだ朗読会を行った。5月「寂聴の『少女小説』を読む」、7月「反戦」の計2回。講座生がよく内容を読み込み、伝わる朗読ができた。</p> <p>日時: 令和元年5月4日、7月6日(全2回・各土曜) 入場者数: 61人 受講料: 無料 会場: 講座室</p>	1,740
3	文学講座 若い人たちのための俳句教室	<p>俳人として10代から第一線で活躍する大高翔さんによる若者向けの俳句講座。「自分らしい句を作ること」を目標とし、句会を重ねることで実践的に作句方法を学んだ。最終回では講座で提出した句や新作をまとめて各自15句のミニ句集を作成し、合評を行った。大高さんは、故郷で若い人たちと俳句を楽しむ機会が持てたことを大変喜んでくれた。また、受講生同士のつながりもでき、徳島で若者が俳句を続けていく土台作りの一歩となった。</p> <p>日時: 令和元年5月～9月(全5回・各土曜) 受講者数: 61人 受講料: 無料 会場: 講座室</p>	489,110
4	文学講座 短歌を作ろう	<p>現代短歌の秀歌を鑑賞しつつ、実作を基礎から学ぶ講座。「自分を詠む」「家族・友人を詠む」「社会・時代を詠む」「遙かな世界を詠む」「故里を詠む」など、各回のテーマについて理解を深めながら、経験者も初心者も共に実作を試み、短歌を作る楽しさを学んだ。講師は歌人の竹安隆代さん。最終回は新型コロナウイルスの影響で中止した。</p> <p>日時: 令和元年9月～令和2年2月 (全6回・各土曜) 受講者数: 192人 受講料: 無料 会場: 講座室</p>	106,060
5	文学講座 名著講読「恋愛を読む」	<p>講師は富塚昌輝・徳島大学准教授。『みだれ髪』『浮雲』『D坂の殺人事件』の名著を恋愛を切り口に読み解いていった。近代文学成立により、人間の内面が表現されるようになった。与謝野晶子は男尊女卑の激しい時代において、扇情的に恋愛を表現した歌を詠んだ。二葉亭四迷は言文一致により、内面の苦悩をそのまま表現することに成功した。江戸川乱歩は人間関係が希薄になった近代都市で、他人の内面の秘密を覗き見たいという欲望を見事に表現した。最終回は新型コロナウイルスの影響で中止した。</p> <p>日時: 令和元年10月～令和2年3月 (全4回・各土曜) 受講者数: 68人 受講料: 無料 会場: 講座室</p>	59,120

(3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
6	第18回言の葉朗読会	<p>16組、24人によって朗読が行われた。テーマ朗読会とは違い、明治の文豪の作品から最近の芥川賞受賞作まで幅広い作品が朗読された。かけあいやBGMを流しての朗読もあり、2時間という時間を感じさせない楽しい朗読会となった。</p> <p>日時: 令和元年9月21日(土) 受講者数: 61人 受講料: 無料 会場: 講座室</p>	2,050
7	秋の文学講演会 II	<p>ミュージシャンとしての活動に加えて1996年に「くっすん大黒」で作家としてデビュー、2000年には「きれぎれ」で芥川賞を受賞し、以後、多彩な作品を次々と発表、数々の賞を受賞している町田康氏を招いた。音楽においても文学においても、テーマありきでは人の心に届く作品は生まれず、それは着想とは言えないということ、自身の経験や、明治の文学作品を例に分かりやすくコミカルに語り、会場からの爆笑が絶えなかった。10代20代の参加も目立ち、質疑応答は時間が足りないほどだった。講演後のサイン会は長蛇の列となり、1時間ほどを要した。</p> <p>日時: 令和元年11月17日(日) 受講者数: 177人 受講料: 無料 会場: ギャラリー</p>	268,018
8	書道講座 仮名を学ぶ ちらし書き	<p>仮名の大きな特徴である「ちらし書き」。行の高さに変化をつける初級編から、行間を大きく変化させる中級編、前後半の2集団で配置する上級編へと段階的に作品を制作。道具の扱い方や運筆法のわかりやすい説明と、受講生一人ひとりへの細やかなアドバイスで、受講者は熱心に取り組んでいた。講座最終回では料紙に清書して印を押し、額に入れて7月末まで館内に展示した。講師は四国大学名誉教授の富久鳴泉さん。</p> <p>日時: 令和元年6月13日、27日、7月4日 (全3回・各木曜) 受講者数: 33人 受講料: 無料 会場: 実習室</p>	59,330

(3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
9	書道講座 楽しい絵手紙	相手に気持ちを伝える絵手紙講座。はじめに、絵手紙を書く上での心得や筆の持ち方、線の引き方を学んだあと、絵手紙を作製した。第1回は野菜や果物を題材に、簡単なコメントを添えた2種類の絵手紙を作製。第2回は、自由に題材を持ち寄り、「感謝」の気持ちを込めた絵手紙を半切3分の1サイズの画仙紙に書き上げた。講師も驚くほどの上達ぶりで、本格的に絵手紙を始めてみたいという受講生も多かった。受講生の作品は8月1日から31日まで1階ロビーに展示した。講師は日本絵手紙協会公認講師の齋孝子さん。 日時:令和元年7月18日、25日(全2回・各木曜) 受講者数:18人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室	36,620
10	書道講座 書道創作講座 篆書	書体の中で最も早く成立した篆書。その中の“小篆”を使って創作する講座。歴史的背景をふまえた篆書成立についての講義を聴き、書法を実践的に学んだ。初回は泰山刻石の中の2字によって基本点画をマスターし、第2回では作品としての書表現が始まった清代の能書家、鄧石如、呉讓之、趙之謙の書風を学んだ。最終日には半切3分の1サイズに創作。作品の全体像を捉えながら、線と線の間余白がそろよう気を配り制作した。講師は森上洋光・四国大学教授。 日時:令和元年9月15日(日)、22日(日)、23日(月・祝)(全3回) 受講者数:46人 受講料:無料 材料費実費 会場:実習室	57,070
11	書道講座 外国人のための書道講座	今年で3回目となる当館職員による外国人対象の書道講座。英語通訳を行った。はじめに日本の書道や漢字の歴史について話し、書道道具の名称や扱い方、筆の持ち方、書く姿勢を説明した。スクリーンを使用して基本点画を実演しながら練習し、その後、手本を参考に漢字一字の小作品を制作。最後に各自2、3点の作品を提出してもらった。参加者からは「楽しかった。書道を学んでみたい」と好評であった。作品は11月10日から12月1日まで当館1階ロビーに展示した。 日時:令和元年10月26日(日) 受講者数:3人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室	11,030
12	書道講座 書の鑑賞 近代詩文書	近代詩文書の魅力や見方を学ぶ鑑賞講座。書壇の第一線で活躍する石飛博光さんが講師。近代詩文書の名品や自身の過去の揮毫作品を、線の細太や文字の大小、用具の違いなどの観点で分類して紹介。その後は作品を揮毫し、違った作風に書き分けて解説した。受講生は、鑑賞方法だけでなく、普段は見られない講師の筆使いや運筆のリズムを間近で学ぶことができた。 日時:令和元年11月10日(日) 受講者数:110人 受講料:無料・材料費実費 会場:ギャラリー	198,361

(3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	金額(円)
13	書道講座 新春 書き初め 大字に挑戦!	毎年恒例の小学生対象の講座。伝統文化の「書き初め」にちなんで、特大筆(全長46cm、穂の長さ14.5cm×穂の直径4cm)と68cm×70cmの紙を使って大字作品を制作した。当館学芸員が書き初めの由来や、書道道具の材質と使い方、筆の持ち方、書く姿勢、運筆の基本を説明したあと、各自が書きたい漢字一字を、墨をたっぷり含んで重くなった筆で、体全体を使って揮毫した。最後には迫力のある大字作品が仕上がり、作品は1月16日から31日まで1階ロビーに展示した。 日時:令和2年1月13日(月・祝) 受講者数:48人 受講料:無料 会場:実習室・講座室	23,711
14	書道講座 名前を美しく書こう	実生活で活用できる美しい名前の書き方を学ぶ書道講座。講師は辻尚子・四国大学教授。「体裁」「形」「線」の三つが文字を美しく見せる大きなポイントであると紹介したのち、失敗してしまいがちな書き方やその対処法をホワイトボードに範書した。その後は受講生が筆書した名前を講師が添削。良いところは生かしながら、課題を克服できるよう繰り返し練習した。自分の名前に苦手意識を持っている受講生も多く見られたが、講師の的確なアドバイスで徐々に癖が矯正され、少しずつ自信をつけているようであった。なお、新型コロナウイルスの影響で2回目は中止となった。 日時:令和2年2月23日、3月8日(全2回、各日曜) 受講者数:16人 受講料:無料 会場:実習室	23,130
15	ことのは ロビーコンサート	従来の文学・書道ファンだけでなく、より多くの県民に文学書道館の存在を知ってもらい、さらに足を運んでもらって、文学・書道と音楽の深いつながりを気軽に楽しく体感してもらおうと、昨年度に引き続き開催した。美しい中庭を背景に、上質の音楽を聴く喜びを幅広い層の聴衆が味わった。毎回楽しみに参加しているという固定ファンも徐々に増えてきた。 日時:令和元年5月～令和2年1月(全5回) 入場者数:1,438人 入場料:無料 会場:ロビー	1,256,591
	小計		2,820,983

(4) 展示事業【12,507千円】

	事業名	概要	金額(円)
1	文学常設展 瀬戸内寂聴記念室 (常設展示事業)	瀬戸内寂聴の人生をたどりながら寂聴文学を紹介する記念室。京都・嵯峨野の「寂庵」を模した書斎や、心とませる日本庭園を設置している。年2回の展示替えも行った。 期間:通年 会場:瀬戸内寂聴記念室	-

(4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
2	文学常設展 文学常設展示室 (常設展示事業)	徳島の人・場所・文化が織りなす文学回廊。徳島にゆかりの深い文学者とその作品、徳島を描いた文学作品などをさまざまな角度から感じとれる展示としている。展示室内では、年2回の文学企画展として「東京五輪と文学」、「文学者の見たモラエス」を開催した。 期間:通年 会場:文学常設展示室	-
3	文学常設展 収蔵展示室 (常設展示事業)	瀬戸内寂聴寄贈による日本近代女性史の貴重な研究資料など、豊富な資料を保管している収蔵庫内をガラスウォールを通して見学できるようにしている。また、特別展に関連した展示や収蔵品を紹介する展示を行った。 期間:通年 会場:収蔵展示室	-
4	書道常設展 書道美術常設展示室 (常設展示事業)	徳島ゆかりの書家を中心に豊かな書の世界が広がる展示室。年3回の展示替えを行い、収蔵している豊富な作品を幅広く紹介している。本年度は「少字数の書」「中林梧竹の篆書と隸書」「明治の三筆 梧竹・一六・鳴鶴」を開催した。 期間:通年 会場:書道美術常設展示室	-
5	文学特別展 寂聴の少女小説―三谷晴美と憧れの挿絵画家たち (特別展示事業)	瀬戸内寂聴は作家デビューする前に少女小説を書いて生計を立てていた。幼年時代の本名であり、三島由紀夫が選んだ三谷晴美のペンネームで、9年間にわたり雑誌「少女世界」や「ひまわり」、小学館の学習雑誌などに多数執筆し人気を博した。本展では代表作14編を選び、内容を紹介し、その挿絵とともに展示した。それらには一貫して「反戦・平和」への思いが流れ、新時代を生きる少女たちへのエールが込められている。また寂聴が幼い頃から憧れていた落谷虹児の作品を新潟県の記念館より借用展示した。 会期:平成31年4月9日(火)～令和元年5月26日(日)43日間 入場者数:461人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	2,477,647
6	書道特別展 小坂奇石の小品 ―その多彩な表情 (特別展示事業)	海部郡美波町生まれで、昭和を代表する書家として知られる小坂奇石(1901～91年)。今回は、奇石の「小品」を展覧した。気概あふれる書を多く残した奇石にあって、洒脱・柔和・枯淡な作風など表情豊かな数々の小品も、それぞれが異なる魅力に富んでおり見逃せない。本展では、陶磁器に書かれた6点を含む、奇石の作品46点を紹介。関連イベントとして、作品解説、展示解説をそれぞれ1回開催したほか、A4版のパンフレットを観覧者に配付した。 会期:令和元年6月21日(金)～8月4日(日)39日間 入場者数:1,262人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー	1,001,421

(4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
7	文学特別展 くすのきしげのりの世界 (特別展示事業)	鳴門市在住の児童文学作家・くすのきしげのりの作品世界を紹介する展覧会。代表作『おこだでませんように』の全ページのほか、主要な作品の原画を展示。さらにパネルで90冊を超える絵本・児童書を紹介した。会場内に本を読めるスペースを設けたほか、ロビーで登場人物と一緒に記念撮影できるコーナーも設置した。家族連れなど子どもから大人まで幅広い年代が来場し、展示を楽しんだ。 会期:令和元年8月10日(土)～9月23日(月・祝) 39日間 入場者数:1,166人 観覧料:250円～510円 会場:特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	2,195,261
8	書道特別展 没後20年 久保幽香展 —香り立つ叙情 (特別展示事業)	近代詩文書の分野で徳島の女流書家の第一人者として活躍した久保幽香(那賀郡那賀町生まれ)の没後20年を記念した特別展。個人および当館が所蔵する33歳から没年までの作品35点を制作年順に展示し、書風の変遷をたどった。さらに関連資料で久保の書の歩みを紹介した。観覧者にはA4版57ページのパンフレットを配付し、関連イベントとして、門下生を講師に招いてトークを開催したほか、担当職員による展示解説(2回)を開催した。 会期:令和元年10月4日(金)～11月17日(日) 38日間 入場者数:687人 観覧料:260円～520円 会場:特別展示室・書道美術常設展示室	1,839,624
9	文学特別展 現代詩歌の冒険 —徳島の詩人・歌人・俳人たち (特別展示事業)	難しいと思われがちな現代詩歌だが、詩歌人が鋭い感性でとらえ、選び抜いた言葉で表現した世界は、かつて感じたことのない驚きや感動を私たちにもたらす。独自の感性が光る徳島ゆかりの6人の詩歌人—詩人の鈴木漠・清水恵子、歌人の紀野恵・田丸まひる、俳人の大高翔・野口理一の冒険性に富んだ作品を展示し、現代詩歌の言葉の魅力を感じてもらった。関連イベントとして、詩人トーク、俳人対談、歌会を開催した。 会期:令和元年12月14日(土)～ 令和2年2月11日(火・祝) 44日間 入場者数:469人 観覧料:260円～520円 会場:特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	1,710,195

(4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
10	書道特別展 徳島に眠るお宝の書 (特別展示事業)	徳島県在住の書家や個人が所蔵する、著名な書家の書や文房四宝など、普段は目にすることができない秘蔵の「お宝」を発掘し紹介する特別展。青山杉雨、村上三島など戦後の書壇をけん引した現代書家の書から、會津八一が棟方志功に宛てた書簡など幅広い日本の書44点と、何紹基、鄭孝胥など中国の書9点、貴重な硯と筆29点の合計82点を展示した。作品の魅力とともに、所蔵者の収集への厚い思いも感じてもらえるよう展観した。 会期: 令和2年2月15日(土)～3月22日(日) 32日間 入場者数: 378人 観覧料: 260円～520円 会場: 特別展示室・書道美術常設展示室	1,526,670
11	文学企画展 東京五輪と文学 (企画展示事業)	2020年の東京オリンピックを控え、1964年に開催された東京五輪を徳島ゆかりの文学者を通して振り返る企画展。徳島生まれの詩人・野上彰が訳詞し、開会式と閉会式で歌われた「オリンピック讃歌」(パラマ作詞、サマラ作曲)、徳島生まれの作家・瀬戸内晴美(寂聴)が見た柔道の観戦記、徳島ゆかりの英文学者・中野好夫が書いたパラリンピックの観戦記などを、楽譜やレコード、写真などを交えて紹介した。 会期: 令和元年6月15日(土)～8月31日(土) 68日間 入場者数: 2,188人 観覧料: 100円～300円 会場: 文学常設展示室	459,309
12	企画展 中林梧竹の篆書と隷書 (企画展示事業)	“明治の三筆”に挙げられる中林梧竹の篆書と隷書に焦点を当てた展覧会。梧竹の理解者であり、最大の収集家であった海老塚的伝から徳島県に寄贈された作品を中心に展観。2度の中国留学における金石碑文研究を基に、梧竹が創造したユニークな篆書やモダンな隷書など、当館が所蔵する計16点を紹介した。また、当館の収蔵作家である眞名菘翁と小坂奇石の作品も展示した。 会期: 令和元年6月18日(火)～10月1日(火) 91日間 入場者数: 2,846人 観覧料: 100円～310円 会場: 書道美術常設展示室	207,729
13	文学企画展 文学者の見たモラエス (企画展示事業)	ポルトガルの軍人・外交官として日本に滞在し、『徳島の盆踊り』『おヨネとコハル』『日本精神』など優れた日本文化論を本国ポルトガルに発信し続けたヴェンセスラウ・デ・モラエス(1854-1929年)。徳島に隠棲し、孤独な死を遂げたその数奇な運命を、没後90年を迎え、佐藤春夫、菊池寛、志賀直哉、遠藤周作ら文学者17人の言葉とともに振り返った。 会期: 令和元年11月8日(金)～令和2年2月9日(日) 74日間 入場者数: 902人 観覧料: 100円～310円 会場: 文学常設展示室	508,883

(4) 展示事業

	事業名	概要	金額(円)
14	書道企画展 第4回 書道創作グランプリ (企画展示事業)	<p>小学4年生から高校生までを対象に、応募のあった695点の中から218人を選考(予選)。予選通過者と、招待(グランプリ1回受賞者または準グランプリ2回受賞者)を対象に11月2、3日に本選を実施した。小中学生は各学年、高校生は漢字・漢字仮名交じり・仮名の各部門でグランプリ、準グランプリ、金賞、銀賞、銅賞を決定し、11月30日～12月11日まで本選作品すべてを展示した。また金賞受賞者以上を対象に12月8日に表彰式を実施した。</p> <p>会期:令和元年11月30日(土)～12月11日(水) 10日間 入場者数:573人 観覧料:無料 会場:ギャラリー</p>	561,830
15	書道企画展 「今年の一文字」展2019 (企画展示事業)	<p>年末恒例の「今年の一文字」展。この一年を振り返り、世相や印象に残ったことを表す漢字一字を筆でハガキに書いてもらった。6歳から73歳まで693点の応募があった。今年最も多かったのは「新」。2位は「友」で小学生からの応募が多かった。続いて「笑」、「楽」が同数。5位は「挑」であった。5位までは、いずれも昨年も上位にみられた漢字であった。昨年に比べ増えたのが6位の「変」。令和の「令」も8位に入った。</p> <p>会期:令和元年12月12日(木)～27日(金) 14日間 入場者数:317人 観覧料:無料 会場:1階ロビー</p>	18,162
	小計		12,506,731
	合計		17,659,842